

はなせるくらぶ

大村伸一

(20171020-20171118)

話せるクラブは目の前にあった。どうやってたどり着いたのかはわからない。入り口の灯りはまぶしくて扉の横にいる呼び込みの顔は見えないようになっている。呼び込みは人見知りで無口だから、姿が見えなければ安心して店に入れるだろう。呼び込みの背中には紺色のたてがみが見えたけれど、一步店の中に入ればもう振り返ることはできない。

店に入るとボーイとバニーガールが笑顔で待っていた。案内のボーイは笑顔を絶やさない。バニーガールも笑顔は絶やさない。一番奥のテーブルを頼むには結構なチップが必要だが、チップがなくても笑顔は絶やさない。彼らは生まれる前から笑顔を続けているのだと思った。チップはなくても壁際の席ならすぐに案内してくれる。ボーイが先に立ち壁伝いに席まで案内してくれる。プラスチックの絨毯が足跡もそれに付随する足音もすべて吸い取っていた。店の中は静かだ。店はまだ開いたばかりだ。

席に着くとすぐにボーイは離れていった。離れる時わざとテーブルの上に小型の旅行用語辞典を落としていく。それさえあればしばらく客は退屈しないだろう。表紙を見ればまだ本屋にも並んでいない版だとわかった。手に取ろうとするとバニーガールがあわてて駆け寄ってきて、手術につかう手袋を僕の両手につけていった。離れる時パチンと音がしたが少しも痛くはなかった。口元に指を当てて、素手で触るような無作法はまだ時間が早いというようなことを言っていた。そのあとそっと辞書を開くと「あびるほど」という言葉が見つかった。それは知らない言葉だった。

気の早い客が席を離れてフロアに立ちはじめた。みごとな胸をした女がフロアの中央に立ち、手帳になにか書き付けている。近づく男がひとりもないのは、まだ店の合図がないからだろう。女の手に行っているペンは照明をうけてきらめき、何を書いているのか興味を掻き立てる。まさか似顔絵を描いているわけではあるまい。まさか日記を書いているわけでもあるまい。まさかそんなところで会計報告書を書いているわけなどあるまい。男たちの体は次第に熱くなる。

しばらくすると別のボーイが見知らぬ女を案内してきた。相席をお願いしますと言いながら女には見えない側の目でウインクをしてみせる。話してもいいのだろうか。まだ話す時間じゃないのだろうか。女が旅行用語辞典を見たそうにしていたので、微笑んでから別のページを開いてみせた。偶然開いたページに「あぶらみ」を見つけた女は頬を赤らめて僕の腕をそっと抓った。馴れ馴れしいと思ったけれどそれは「あぶらみ」のせいかもしれない。これが彼女の望みだろうか。もういちど抓られればわかるはずだが二度と抓られることはなかった。辞書の言葉は尽きなかったが、いつまでも話せる雰囲気にならなかった。「これでもはなせるくらぶなのかしら」と女は言った。やはりすこし行儀を知らない女なのだろう。

見たことのあるバニーガールがテーブルにメモ用紙とペンを置いていった。ペンは赤と黒の二色で、正しい言葉と間違った言葉をそれで色分けするのだという。僕は「分光器」と黒で書き留めた。女は辞書のページをさらに繰ってから「エルサルバドル」と黒で書き留めた。他のページを開

いて見せると、女は別の言葉を見つけ「はんぶく」と書いてすこし俯いた。赤を使うことなど決してないだろう。言葉を間違えることなどあるわけがない。辞書をなんども引きながら、メモする言葉には切りがなかった。外は寒かっただろうか。川は流れていたのだろうか。そんなことは忘れてしまった。

自分のメモを見せ合えるほどに打ち解けたのだから、そろそろ話を始めてもいいのかもしれない。みんながそう思い始めたころ、クラブのマスターが始まりの言葉を叫んだ。フロアで待ちわびていた面々が話し始めた。最初は相槌をうつだけの女も、やがて熱帯の鳥のようにさえざり始めた。床の氷が溶け始め天井まで湯気が昇った。溶けた氷で客はすべてお互いにしがみつく。マスターは至極満足そうだ。ぶつかったはずみで床に落ちたメモ用紙は靴に踏みつけられ誰にも読めなくなってしまうだろう。折れたペンからはインクが流れ出し、フロアの床には赤と黒の模様が描かれる。それはこの町の地図に違いないけれど、この町の誰も地図を読みたいなどとは思わないはずだ。

フロアの中央で、天井に頭が届きそうな大男が立ち上がった。黒縁のメガネで髭面の学者だと自己紹介した男は話をしたくてたまらないらしく、難しい講義をはじめてしまった。何の講義なのかは誰にもわからない。誰も聞きたいと思わないのだから、それは話していることになるのだろうか。僕の目の前の女はあくびをしながらまだメモ用紙に書き写している。旅行用語辞典の比較的大きな文字で印刷された言葉を書き写している。僕は彼女の指先を見ている。文字を書くたびに指先からこぼれ落ちる銀色の粒には棘がはえているから、いずれ空中を漂ってきて僕の目に刺さるはずだ。僕は何も見えなくなるのだろう。

店のスタッフが六人がかりで、学者の体を羽交い締めにし、裏口から外に連れ出した。氷の床には重みで罅がはいったが、中央の面々は逃げるわけでもなく、罅のはいった氷に映る歪んだ顔がおもしろいと会話がはずむ。フロアにはまた熱帯の鳥のさえざりが満ちてくる。替わりの辞書を運んできたボーイが颯め面をして空気の読めない客は困りますとささやいた。誰のことを言っているのかはわからない。笑っていないボーイを見たのはそれが初めてだった。そんな顔をしたらすぐに臆になってしまうだろう。思ったけれどもそんなことは言わなかった。

替わりに置かれた幼児口語中辞典には索引がついていて、それに気づくと女は僕のみつめながら、そのうえ歯をみせて笑った。自分の辞書を持ったことがないのだという。索引を見たのも二年ぶりだという。それが初恋だったと気づいたのは二年前のことなのだという。初恋の話をはじめれば終わりがなくなることは明らかで、女の頬からこぼれた粒の表面から銀メッキがはがれはじめる。幼児口語中辞典を開いて「なまもまな」を見せると、女は自分の失言に気づいて少し口ごもる。銀の棘がささった僕の中から赤い雫がこぼれおちる。

決められた時間になると、バニーガールは順番に席をめぐりメガネやナイフを新しいものと交換する。それはだめあれはだめだと耳元でささやきながらテーブルの間をくるくるとまわる。まわりながらフロアの反対側にたどり着くのにそんなに時間はかからない。愛の言葉をささやくことも、別れの一言を口にするのも店の中ではだめなのですと、幾度聞かされたことだろう。うさぎの尻尾には値札がついていたから、あれはただの臨時雇いだったのかもしれない。

本を閉じる大きな音と同時に、マスターが意味のわからない言葉を叫んだ。意味はわからなくとも、客もスタッフもみんなその結末は分かっている。フロアの面々がまわりにどくと、床の真ん中の氷が崩れて穴があく。そして、できた穴から大きな台がせり出し、やがてフロアの中央に大きなテーブルが出現した。客の目には、台の上に積み上げられた全二千二百二十二巻の大言語大辞典が見えるだろう。全巻揃いなど、はじめて見た客ばかりだ。大きな歓声が店の壁を震わせた。台の近くにいた客がとびついて辞書を手に取ると、席に座っていた客もあわてて続いた。大言語大辞典はたっぷりあるから、触れない者などひとりもないだろう。

大言語大辞典でみつけた言葉を誰かが読み上げた。

はなせるクラブ(はなせるくらぶ)[名詞ときどき形容詞]

1. 話をする棍棒 話をするはずのないものが話をするという意味。転じてありえないことの意。
2. 話の分かる棍棒 親身になって聞いてくれるが、実は何もわかっていなかった者の意。
3. 分離可能な棍棒 棍棒には継ぎ目がないので分離することはもともと不可能であるという意味。転じて意味のないことの意。
4. 客の間でお互いに話をするのが許されている社交場。

読み続けている間、他の客ははしゃいでメモを取り合っていた。そしてその意味について、誰もが自分の解釈を語り、その解釈に対する他の誰かの補足や反論が続いたから、メモを取る手は止まらない。だが、そんなに熱心にメモを取っても誰かが別の言葉を読み上げ始めると、古いメモ用紙は床に捨てられ踏みつけられた。言葉はいくらでもあったから、あとからあとからメモ用紙が配られ、ペンが折れると替わりが手渡しされた。大言語大辞典を写し終わるまでこの騒ぎは終わらないと思った。誰もがそう思っていたのだと思う。

しかしそれは入り口のドアが音を立てて閉められたときに終わった。入り口で呼び込みをしていた紺色の毛並みの牡鹿が入ってきたからだ。牡鹿はみごとな角をゆっくりと揺らしながらフロアを横切ってカウンターに向かった。強い酒を一杯煽ってから、牡鹿はその姿とはうらはらにおだやかな声で歌いはじめた。

これがお別れの始まりです
また会える日はないでしょう
これで終りだと決まっています

言葉の意味など知りたくもないけれど
あなたのことはすべて知りたい
愛の言葉など聞きたくもないけれど
あなたの嘘をすべてあばきたい

これがお別れの終わりです
また会える日はないでしょう
もう始まりなどありません

その歌が合図だったらしく、客はひとりずつ裏口のドアから消えていった。列に並ぶこともなく口論などしなかった。誰ももう新しい言葉を使わなかった。そういえば話をするのを忘れていたよ。ずっとしゃべりつづけていた客が、そう言って満足そうに帰っていった。

相席の女の姿も見えなくなっていた。フロアの氷はすっかり溶けて、大言語大辞典はどこかにいってしまった。目の見えない僕に、ボーイは足元に気をつけるようにささやき、手をひいて出口のドアまで案内をしてくれた。そのボーイは笑顔だっただろうか。それは僕にはわからない。

話せるクラブの前にいた。どうやってたどり着いたのかはわからない。話せる店はもうどこにもないのだろう。もうすぐ夜があけるだろう。